

路肩の蝉

烏丸 琴子

安穩の地中を捨てて空へ発つ。
すべては快樂のために。
まるで狂気の沙汰だ。

道端のクレド

照り返しの熱が立ち上る石造りの街には、クレドのような人間が溢れていた。

まだ午前中というのに容赦ない日差しの降る大通り。澄み切った青空を求めて、立ち並ぶ洒落た喫茶店は扉を開け放ち、道端にまで席を並べていた。時折吹き抜ける風に、珈琲を楽しむ人々のため息が応える。各テーブルに備え付けられた爽やかな白と空色のパラソルは傍らに植えられた細身の街路樹の緑に鮮やかに映えていた。

そのパラソルの一つに、碧い目を大きく見開き、イーゼルに立てかけられた二枚の絵を見比べる身なりの良い女がいた。額に浮かぶ汗の玉をレースのハンカチで拭いつつも、絵からは視線を外さない。彼女の隣にはその恋人らしい立派な紳士と、伸ばし放題の髭をかきながら二人を見守る男がいる。彼らの周りには小さな人垣ができつつあり、それをさらに、店先に座り込んだ男の奏でる異国の楽器の調べが包んでいた。

芸術の都にはよくある光景だった。そのいつもの景色に紛れて、クレドは彼ら「芸術を愛でる文化人」の隙間を埋める役目をしている。つまり、浮浪者の一人としてすえたにおいを放つボロを纏い、手持ち無沙汰に立ち尽くしているわけだ。一見、人垣の中心にいる「芸術家」男とクレドには大した違いはない。どちらもやつれた不潔で臭い男だ。だが一方は立派な画家で、一方はこの古き良き芸術の街にはびこるドブネズミなのだった。

「ねえあなた、どう思います？ こちらも美しいけれど、こちらはセンスが光ってると思いませんか？ ああどうでしょう！

「気に入ったのならどちらも貰いなさい。後で思い出して惜しむのでは可哀想だからね」

そんな会話の後、結局二人は二枚の絵を買い取った。クレドは左右に頭を動かして、群集の隙間から絵を覗き込む。人々の後頭部の間からかろうじて見えたのは、何の面白みもない風景画とおよそ何が描かれているのか理解できないような、原色の黄色や緑で塗られた何かのシンボルだった。絵を抱えた紳士とはしゃぐ女が去っても人垣は画家の周りを離れず、また別の誰かが品定めを始めたようだ。陽気だった音楽が途絶えて、民族色の強い独特なタンゴが取って代わった。

クレドはもうすっかり自分の定位置となった路肩の低い石垣に戻って、誰も寄り付かない熱い石畳に広げた自分の絵を見渡した。

題材のほとんどが著名な叙事詩の名場面だ。そういうものの方が売れると地元の友人から聞いている。更によく売れるのは宗教を盾にした裸婦像らしいが、筆が進まないでクレドは描いたことがない。実際、女性の裸体を明るいところでよくよく挿んだことがないのだから、どう描いたものか分からないのだ。

一枚いちまいを見つめ終わると、クレドはため息をついて腰を下ろした。彼の作品全てに共通しているのは、特に抜きん出てどうということもないが、悪くない絵だということだろう。そして、覇気のなさが否めない。クレドは絵を描くことが好きだったが、その対象に愛情を持つことがないのだ。

「まあ、いいか……」

彼は呻いて鉛筆をとった。日差しにあぶられ額に汗が滲んでも、拭いもせず新しい絵に取りかかる。そうやって今日も、誰の目にも留まらない絵が増えた。あまり出来も良くなかったので、数日前に同じようにして描いた多少は見栄えのする絵の下に重ねる。たくさんの男が同じように無意味な絵を石畳の上に広げ、積み上げていた。訴えるものもあれば寡黙なものもある。その中で脚光を浴びるのは僅か、ほんのひとつまみだ。残りはただのゴミ。この街を汚す自意識の排泄物。

着飾った人々の冷たい視線に気付かないはずもない。それでもクレドは故郷に戻るつもりにはならなかった。ここでただ無心に絵を描く生活の方が、彼にはずっと幸せだからだ。

クレドは決して貧しい家の出ではない。田舎住まいでこそあったが、この街を我が物顔で練り歩くいわゆる成り上がり者など相手にもしない名家の生まれだ。物質的には何の不自由もなく、周りから見れば羨ましい限りの生活だったろう。しかし、精神の自由は存在しなかった。そんなものは与えまいと、日々代わる代わる家庭教師が押し寄せる。語学、数学、歴史学に経済学、化学、哲学医学農学天文学地学音楽。とにかく、「がく」の付くものならなんでも押し込もうという暴挙によって、クレドはどんどん侵されていった。そのたび彼は小さく体を折り畳んでいく。少しずつ、「がく」に押しやられていく。そのままクレドは消えてしまいそうに感じていた。

現実世界から追い出された精神は空想を羽ばたく。あるいは、羽ばたく空想に遊ぶ。その手助けこそが描くことであった。それだけが彼を解放し得た。現実から切り離し優しく受け入れてくれた。

家族も家庭教師も、身分目当てに群がってくる女どもも、口では褒めても眉のあたりであざ笑っていた。クレド自身、

才能の有無はよく分かっているつもりで、今更認められないなんて嘆く気もない。ただこうやって絵を描き続けること自体が望みだったのだから。

名声なんていない。他人の評価は所詮現実世界の付属品。そんな世界などとうに飛び出したクレドには必要ないのだ。ただ空想を飛ぶ透明な羽さえあればそれでいい。

黎明の人 1

太陽が真上を横切る頃。この時間になると、暑さと空腹の導くままに故郷の幻を見るのがクレドの日課となっていた。手は勝手に、自室の窓から見える小さく穏やかな川の煌めきや、青葉の茂る初夏の土手を描いていた。窓辺まで枝を伸ばす古木に付く虫の音さえ聞こえる気がする。

「君も絵描きか」

そんな夢を吹き消したのは、あくの強いひしゃげた声の老人だった。

クレドは走るままにさせていた手を止めて顔を上げた。物悲しい異民族の舞曲が耳に戻り、そして揺らめく石畳の街で茹でられている自分にようやく気づく。喉と舌がからからに渴いてひりついていた。

目の前にしゃがみこんでいるのは酒臭い初老の男で、染みだらけでどす黒い、夕食特有の顔色をしている。彼は絵を見ようともせずクレドを無遠慮に覗き込んでいた。その瞳は陰惨な牢獄の闇を含んだ土壁色で、昏々とした熱をたぎらせている。見るからに絵を買いに来た風でもないので、クレドは戸惑った。居て困ると言うわけではないが、気持ちのいい男でもない。何と言って追い払ったものかと思案しながら視線を落とし、描きかけの絵を再開した。

「気に入った」

しかし男は突然、そんなことを言い出した。客だったのかと慌てて取り繕おうとして、クレドは画材一式ひっくり返して立ち上がる。屈んだ男は相変わらずの嫌な視線でクレドをじっと見つめていた。

「どの絵がお気に召しました？」

「君、名前は何だ」

「クレドと言います」

「クレド？ まあ堅苦しいが、悪くない」

男は一步離れてクレドを上から下まで見渡した。肩まで伸びた金髪から、最近の不摂生から少し痩せてしまったとはいえ、馬や剣で鍛えた体の筋の線までなぞるように。

「僕の助手になれ」

「助手？」

意外な言葉に思わず聞き返す。そのみすぼらしい男は、立ち上がってもクレドの胸くらいの背丈で腰も大きく曲がっていた。継ぎ接ぎだらけのぼろに覆われた体は、それ越しにも貧相であることが分かる。とても助手を必要とする類の人間には見えなかった。介護ならそろそろ考えるべきかもしれないが。

「悪い条件じゃない。衣食住しっかり面倒見てやるし、絵だって好きなだけ描かせてやる。素質がありそうなら僕が教えてやらんでもない」

「あなたは画家なのですか？」

「まあ、描くのは好きさな」

礼儀も忘れて訝るクレドに、老人はそれまで背中に回していた左手を開いて見せた。指はタコだらけで歪に変形し、骨に皮を貼り付けただけの細い腕からは想像出来ないほどに太い。指先や短い爪の端は、絵の具らしいどす黒いものがこびりついたままになっている。

「僕はローブだ。とりあえずはクレド、飯でも食わんか？」

黎明の人 2

そしてクレドは、どうにも臍に落ちない気持ちで床に倒れ、頬を冷たい石の床に押し当てていた。広い室内は静かで、布の上を筆が走る独特の音だけが響いている。

あれからローブにやや強引に連れて行かれたのは、故郷にいた頃にはよく家族で行ったような古く立派なレストランだった。はっきり言って今のクレドやローブでは、入り口に近づいただけでも水をかけられ箒を片手に追い立てられるような店である。しかし二人は丁重にもてなされ、料理長がわざわざ挨拶にやって来た。こんなことは、名家の息子であった時分にも希なことだった。どうやらローブは、若い頃からこの街で成功を重ねてきた画家らしい。

「次は仰向けになれ。上半身を少し浮かせて、顔は向こうの窓だ」

言われるままにクレドはポーズを取ってやった。少し無理のある姿勢に顔が歪む。

「クレド！ 死体がそんな顔をするか！」

「すみません。でも、きつくて」

「仕方ない。そこのソファにでも座れ、ただし死体らしくな」

ローブの指したソファも立派な仕立てで、背もたれには色味の深い織物が貼られている。並んでいる繊細な刺繍の施されたクッションはどれも柔らかく弾力もあり、背中に挟むと沈み込む体を優しく受け止めてくれた。石の上での生活に慣れ始めていた体はそれだけで安らいだ。深い藍色のドレープカーテンを下げた巨大な窓を眺め、気分良く寄せてくる眠りと戦いながら、クレドは考える。このローブという男、ただの絵描きであるはずがない。名のある本物の画家に違いなかった。ならば名前くらいは知っているはずだ。

そうやって考え込むうちに、いつの間にか差し込む午後の光に飲み込まれていた。眠っていたのだと気付いたのは、ローブの不格好な左手で叩かれた時だった。

「おい、起きんか！」

もう一度彼が手を上げたので、クレドは慌てて立ち上がった。暮れの陽が芸術の街の影に落ち込んでいく時の、トパーズの輝きが大きな窓から差し込んでいる。

「見ろ、なかなかの出来だ」

腰の曲がったローブはそれでも胸を張って、いつの間にか完成している自作を顎で指す。乱雑にばらまかれたパレットや絵の具と古ぼけた脚立の向こうに、その絵は堂々と構えていた。その圧倒的な彩りに、クレドは言葉を失う。

砂を含んだように黄みがかった色調で表現されるのは、絵画の世界ではなく紛れもない現実の光彩だった。砂埃の収まらないくすんだ空気の中で、生々しい肉が絡み合い倒れ伏す。その人々の表情に満ちる憎しみ、怒り、悲しみ、恐怖。激しい意識の群が画面から捻れるように放たれて、黄昏の部屋に広がりそのまま空間を塗り潰してしまうようだった。覆い被さるように訴えて、心にすがりつかれるようだった。

「あなたはひょっとして、プレザージュ先生？」

夜が来て部屋が暗くなり、絵が闇に落ちてようやく、クレドはそうとだけ尋ねた。

「そうだ。僕はローブ・プレザージュ。人間の陰惨を嘆き、暴き、正す。新たな芸術の黎明を呼ぶ者だ」

穴

見た目こそは卑しい乞食だが、ローブは誰より芸術を愛しその発展を願う男だった。彼の下にいと、描きたいもの、学びたいものが次々に湧き出してくる。クレドはそれを喜んで、寝る間も惜しんで努力を重ねた。その姿勢に師も喜んで力を添えてくれる。クレドにとって人生で初めて味わう充足の時が始まった。

まさに黎明。よりどころのなかったクレドの情熱は、今ではローブの絵が内包する魅力に標準を定めていた。その根幹が何に属しているのかは分からないが、ローブと彼の作品は強烈にクレドを惹きつける。ローブの絵が完成すると、クレドはいつも時間を忘れて、明け方までその絵に見入ってしまうのだった。

今夜もクレドはアトリエで、一人ローブの絵を見つめていた。燭台からランタンからかき集めて照らし出したその絵は、東の国の内戦を題材としている。遠景に描かれた戦場には影が差し、空は黄土の嵐にくすんでいる。画面前方に押し出される人々からは、今にも悲痛の叫びが零れようとしていた。

隙のない構成、リアルな絶望の色。クレドはため息をついた。

素晴らしいと素直に感じた。この恐ろしげな画面には、ローブの気高い理念が満ちている。優しく、しかし時に厳しく人間の誇りを慈しむ、猛々しい雄叫びが絵の具の下にかろうじて塗り込められている。明日の昼過ぎにはオーナーに引き取られていくその絵をじっと見つめていると、ふとクレドは違和感を覚えた。絵には小さな穴が開いている。

馬鹿げている。あのローブが、そんな失態を放置するはずがない。しかしいくら目を凝らして見ても、やはり絵には小さな穴が開いている。クレドはゆっくり絵に近づいた。穴は彼が何とか入ることができるくらいのサイズで、顔だけ突っ込んでみると、上へ向かって狭い洞窟が続いているのが分かった。その先にはやはり小さな穴があって、光が差し込んでいる。

妙に汗が吹き出してきた。夜の空気は決して暑くもないはずなのに。上の穴に向かって手を差し伸べてみると、白い手の甲にチリチリとした痛みを感じた。それは夏の昼下りの、手加減のない日差しに似ている。

クレドはその熱に向かって、縦穴をゆっくり登って行った。暗く迫るような洞窟の壁は不安と恐怖を煽ったが、それよりも穴の向こうの正体を知りたかった。人知を超えた財宝、秘境の地の甘美な果実の気配を感じて、本能が求めるままにクレドは穴をよじ登る。

その先にあったのは夏よりももっと芳しく、身を焼くほどに切ない世界だった。情熱が沈むことなく燃え盛り、渇きと潤いの風が交互に吹き荒れる。その先には、抗い難い真っ青に透き通る快楽が横たわっていた。体は強くそれに引き寄せられるのに、クレドの理性は知っていた。眩しすぎる光は毒である。網膜かどこかに痛みを感じて、クレドは顔を背け手で両目を覆った。辺りは一瞬、暗くなる。

そして恐る恐る再び目を開くと、そこは薄暗いアトリエだった。十数本に及ぶろうそくの明かりがローブの絵を照らし出しているが、しかしもうあの穴はなかった。クレドはもう一度穴を見つけようと絵に近づいた。しかし急に怖じ気づき、足を止める。これ以上この絵を見てはいけない気がして、燃え続けるろうそくもそのままに、彼は走るようにして寝室へ逃げ出した。

「クレド、サロンに出展してみろ」

ローブがそんなことを言い出したのは、クレドがアトリエで異国の植物をデッサンしているときだった。

「僕が？ いいんですか？」

「僕の弟子の絵をみんな見たがとるからな。まあ、まだまだお前の絵なんぞには期待しとらん。顔見せだと思え」

助手ではなく「弟子」と呼ばれるのは初めてのことで、クレドは思わずにやけた。しかし笑っている場合ではない。

「締め切りまであと一ヶ月だ。下手でも構わんが、期日は守るように」

「一ヶ月！」

クレドは声を上げた。あまりに急すぎるが、断るつもりも手を抜くつもりも毛頭ない。むくむくと、力強い何かが胸の内から膨らんでいく。

「何だ、嫌なのか」

「まさか！ 先生の顔に泥を塗るようなことはしません。必ず、恥ずかしくない作品にしてみせます」

「あまり気負うこともない。お前にはお前の力量に合ったものしか作れないのだから。妙な野心はそれすら損なうぞ」

「わかりました、任せてください！」

ますます力強く頷くクレドに微笑んで、ローブはアトリエを出て行った。

しかし、与えられた時間は短すぎた。突然に「描け」と言われても、何を描いていいのか皆目見当もつかない。ローブのように強烈な悲劇を持って訴える絵は素晴らしいが、自分もそれに倣ってはあまりにつまらないだろう。だがクレドはあの絵にこそ魅力を感じているのだ。他に描くべきモチーフを、クレドは知らない。初めの五日間はほとんどそれに頭を悩ませて過ごした。石畳の街や森を散策したり、ローブの友人の音楽家を訪ねたりもした。そして夜になると一人ベッドを這い出し、ローブのスケッチや、彼が手元に残している数少ない作品を眺める。その度、あの小さな穴が視界にちらついた。

初めのうちはまだ、抵抗することができた。だが無為に過ぎる時間が、クレドを焦らせていた。このままではいけない、希有な師の期待を裏切ってしまう。そんなことはあってはならない。彼を落胆させるくらいなら、少しだけなら。

クレドは再び穴を登った。そして、炎のように燃え盛る夏の空に導かれるまま今度こそ、そこに広がる快樂の正体を知った。

引き金の罰

完成した絵は展示まで見せない約束になっていた。ローブの意見を介入させたくないからだとかレドは言ったが、内心では怯えていた。ローブがあの絵を見たら、彼はなんと言うのだろう。認めてくれるだろうか、それとも？

レドの心配をよそに、展示会の日はやって来た。広い会場は著名な画家とその弟子たちで埋め尽くされたが、レドには自分も彼らに並んで立つことを誇らしく思う余裕もない。あの絵が、ついに他人の目に触れる。一体どんな評価を食うのか、想像するのも恐ろしい。

息を飲む沈黙の小波を幕開けに、予想は的中した。

レドの絵の前に足を止めた人々は、片手を口元にあて、あるいは歯を食いしばり、あるいはぽかんと口を開けて、しかし一様に、眉をひそめている。背の低いローブは弟子の評価を気配から知ることが出来なかったため、立ち尽くす群れを押し分け絵の前に出た。そして手にしていたメモと鉛筆を、その画面に叩きつける。

「これは何だ、レド！」

しんと静まり返った会場に響く怒鳴り声は震えていた。レドは人陰に隠れて拳を握りしめる。やはり、駄目だったのだ。

レドの絵は「がく」からヒントを得た、古代の禍々しい戦争の終末だった。

ぱっと見ると、ローブが描く絵と雰囲気は似ている。全体に暗い画面は、無数の軍団と敗者の群れからなっている。明るいところも暗いところも、近くでも遠くでも、残虐な殺戮と強奪が繰り広げられていた。猛り狂う勝者の恍惚の真横に、無惨な敗者の死が転がっている。

怒りも悲しみも、恨みすらも失せた死者の、抜け殻のような表情が細部に渡り緻密に描かれて、そこだけくっきりと、人目を吸い込む虚ろな穴のように見る者を飲み込むのだった。それは確かに、ローブの絵とは異質であった。

「何故、あんなものを描いた？」

絵の前を離れて少し落ち着いたのか、ローブはいくらか抑えた声でそう言った。しかしもちろん、彼の中に激しい怒りが渦巻いているのは一目瞭然である。レドは神妙にうつむいて、小さく謝った。

「すみません、先生」

「お前がこんなに浅ましい奴とは思わなかった。お前の美しい体の中に、こんな醜い狂気が潜ん

でいようとは」

繰り返し、何度も頭を下げた。たくさんの事を言い訳にして愛を語ったり情けを語ったり、とにかく散々に言葉を重ねて、クレドは何とか破門だけは免れた。しかし、しばらくは絵を描くことを禁じられ、再び助手の扱いへ戻されたのだった。

しかし数日後の夕方にローブの屋敷に届いたのは、クレドの受賞通知であった。毎年の常連であったローブの絵は選ばれず、他には古くからの伝統を重んじる派閥の人名が並んでいる。

「先生、僕の絵が選ばれていますよ！ 相手にもされないと思ってたのに！」

有頂天になるクレドをよそに、ローブはしかめ面で、ランプの明かりを乗せて何度も通知書に目を走らせていた。

「今までこういう風に取り上げられたことなかったから。嬉しいな……やっぱり賞金とか出るんでしょうか？ 先生、たまには僕の奢りでー」

「辞退しろ」

聞いたこともない低い地響きのような声に、クレドは一瞬、声の主を探して部屋を見渡した。もう一度声が響いてようやく、それがローブのものだと理解する。

「辞退しろ。一時的な物珍しさや悪趣味に担ぎ上げられて、お前を汚されたくはない。今回は辞退しろ」

「しかし先生、僕が賞を受けるなんて、今回限りかもしれないんです」

「まだこんな汚れものを欲しがるともりか！ これが最後の忠告だ、辞退しろ！」

怒鳴られてしまうと、クレドには返す言葉が思いつかなかった。手を伸ばし、受賞通知書を取ろうとする。

「わかりました。記念に、これだけでも」

「駄目だ」

その手をよけて、ローブは通知書をランプの火にかざした。上等な羊皮紙の上を炎が嘗めるようにして滑り、縁から黒く焦げながら縮んで小さな塊になった。しかし一度焼き付いた快樂の空は、絶えずクレドに濃い陰を落とすことになる。

衝動は昼夜問わず彼を襲った。描きたくてしかたがなかった。濃厚に匂い立つ本能への帰順、ありのままの凄惨な無慈悲を。悪意も善意もない、高揚と衝動が振り下ろす冷たい鉞物の鉄槌、

それを無力に受け入れる肉体。この世で最も醜い人間の真の姿、電気信号と化学反応に導かれて動く有機塊の本質。それをいかにも緻密に、精巧に表してやりたい。

そんな果てない空から降り注ぐ欲望も、一人きりの夜、細々としたろうそくの灯りを頼りに粗末なメモ紙の裏に寄せ、紙飛行機にして窓から飛ばすことしかできなかった。

破門されるわけにはいかない。ローブの絵には、まだ学ぶことが山ほど残っていた。夏の盛り、これまでになく気温の高い雲一つない快晴の日。ローブは遠方の友人を訪ねるため、午前中から出かけて行った。

これが好機とばかりにクレドはアトリエに忍び込み、すぐに準備に取りかかった。モチーフも構図も、今にも零れようと言うほど思い描いてきた。いつでも、どんな隙にもすぐに描けるように。

まずはいつでも隠せるような小さなキャンバスを用意する。それから、それより一回り大きなものも。後でこちらにそれらしい絵を控え目に描いておけば、師の機嫌も良くなるだろう。そんな思惑もさしあたりは隅に押しやって、クレドは今こそ飛び立とうとする喜びと共に筆を取った。

興奮に詰まる息。渴く唞内。迫る飛翔の時を焦らすように舌の上で転がして、自分をいたぶり悦に入る。不意に玄関のベルが鳴った。

跳ね上がって、筆を取り落とした。しかしすぐに冷静になる。キャンバスはまだまっさらだし、ローブが戻ったのであれば自分で鍵を開けて入って来るだろう。ただの来客だ。

忌々しく思いながら、クレドはアトリエの扉を開いた。すぐに続くエントランスの向かいにある、大きな玄関を開ける。

眩しい日差しの下、小さな白い日傘の反射にすぐに顔を背けた。視界の隅で辛うじて、飾り気のないドレスの裾を捉える。流行りの色合いでもないが、こんな街では見かけない、古びて質の上がる良い仕立てだと思った。

「クレド！」

開いたままの傘がふわりと浮き、そのまま放物線を描いて離れた地面に落ちた。まだ顔も確認できない夫人は、クレドを力の限りかき抱く。その声はあまりに懐かしかった。

「母さん……どうしてこんなところへ？」

「あなたの絵の噂を聞いたのよ！ プレザージュ先生のところにお世話になってるって」

「一人で来たの？ 下男も連れずに、危ないじゃないか」

「あいつらの話はしたくないわ」

ようやく体を離すと、母は顔を上げた。それを見下ろして、クレドは言い難い気持ちで再び顔を背けた。言葉にするのもためられる老いへの嫌悪が胸を占める。

母はこんなに乾いていただけだろうか。こんなに醜かったろうか。否定的な気持ちだけが、ふつつつと浮かぶ。

「ねえクレド、家へ戻りましょう。お父様もあなたの事認めてくださったのよ、絵は家でも描けるから」

「帰るつもりはないよ。家を継ぐつもりもない」

「それも心配しないで。ヴィクトリーヌが結婚したの、孫もじき生まれるわ」

「なら、僕が戻る必要もないでしょう」

閉じかけた扉の間に、母親は体をねじ込んだ。

「何を言うの！」

彼女の甲高い声は、エントランスの高いアーチ型の天井にとげとげしく、刺すように響いて耳障りだった。

「ヴィクトリーヌもお父様も、あなたと暮らすことを望んでいるのよ」

「それは僕の絵が、立派な人たちに評価されたから？」

無言で顔にしわを浮かべた母親を、クレドは冷ややかに見つめた。浅薄な思考を嘲る色を隠そうともしない。

「帰ってください」

これ以上は立ち尽くす女に構うつもりもなく、彼はアトリエへ戻った。指はあの固い木製の柄を求め、まぶたの裏では一筆一筆の辿るべき道が、鮮やかに輝いている。

「クレド、お願いよ！」

閉まりかけた扉をすり抜けて、アトリエに飛び込んだ母はクレドの腕にすがりつく。その必死の形相にますます嫌悪がつのって、思わず突き飛ばす手にも力が入った。

まるで風に吹かれた紙人形のようなだった。慣れない一人旅に疲弊した貴族の女は予想もしないほどに軽く、なのに大きな音を立てて、乱雑に道具を積み上げたテーブルに倒れ込んだ。柔らか

いものを破って固いものが食い込むときの嫌な音。続いて、肝を潰す甲高い悲鳴が一瞬、上がった。

油や、水の腐った臭いが漂う中、クレドはじっと、絵筆や駄目にしたキャンバスの山に身を投げ出したまま動かない女を見つめていた。暑くわだかまる室内に、開け放った大きな窓から虫の声を乗せた風が舞い込んでくる。

ようやく動いた空気は、濃い鉄の味がした。

「母さん？」

そっと呼びかけてみても彼女は応えない。テーブルの上に上体をうつ伏せて、短く熱い呻き声を漏らしている。クレドはいつの間にか強く握りしめていた筆を投げ出して、母親の肩を掴んだ。小さな体を抱き起こし、真っ赤な両手が抑える横腹を覗き込む。そこにはあばらから生えた、油の染みた黒い柄があった。そこから溢れる鮮やかな紅が、床に小さな池を作っている。あばら骨と水平にナイフが入ったようだ。かなりの深さだろう、内側の動脈を損傷している。内臓にも達しているだろう。この失血では、まず助からない。

「クレド」

自分の息子を見つけると、母親は苦悶の表情から一度歯を食いしばり目を閉じて、それからゆっくりと、微笑んだ。

「そんなに驚かないで。大丈夫よ、お医者様を呼んでちょうだい」

傍目にもそんな風には見えなかったが、クレドは母を椅子に座らせると血まみれの両手を握りしめた。

「すぐ戻るから、頑張って」

汗にまみれて気丈に微笑む様子は、妹が生まれた日の母を思い出させた。出産の騒ぎが終わった後、彼女は晴れ晴れとした優しい表情で「あなたが生まれたときも、私頑張ったのよ」と教えてくれた。

自責と後悔を味わうにはまだ早い。「助からないぞ」と囁く「がく」が肩口にしなだれかかっていたが、それも背負ったまま、クレドは玄関を飛び出し、真夏の太陽の支配する庭を突っ切って馬小屋へ走り込んだ。

暗く湿った小屋の中は、まだ若く艶やかな馬の臭いが充満していた。クレドは全くの暗黒に包

まれて、鼻を突く動物の臭いと息づかいの中、手探りで馬を繋ぐ縄を解く。慣れた作業は手早く円滑に行われた。急げばまだ間に合うかもしれない。

馬に跨ろうというとき、靴底が異質なものを踏んだ。湿って柔らかい藁の上に、一枚の紙切れが落ちている。急かすように、馬は体を震わせ嘶いた。手綱を握りしめたまま、クレドは紙切れを拾い上げて小屋を出る。

じりじりと照りつける太陽の下、輝く紙面に並ぶのは、ローブの友人で政府の高官でもある男の文字だった。短く親しげな挨拶の下で、最近では珍しくなった死刑執行後の解剖会の知らせが妖しく踊っていた。

路肩の蝉

ローブの帰宅は清々しい遅い朝だった。うだるような夏も下り坂に入るのだろう、日差しは明るい風は涼しく、老いた肌を優しくいたわるようだ。

相変わらずの酒臭い赤ら顔は上機嫌で、山ほどのスケッチと共に屋敷へ戻り、真っ先に若い同居人を探した。

しかし彼が見つけたのは、真っ赤に塗り替えられたアトリエのソファと、きれいに解体された肉と骨だった。その横には、流れるような文字でメモが残されている。お世話になりました、とだけ。

巻き付くような狭い穴を越え自らを縛る堅い殻を破り、華奢な二枚の羽を得た。飛び立つ喜びは何もかもを霞ませて遠い地面に置き去りに、ただ快樂に引き寄せられるままぐんぐん高く昇って行く。

やがて季節は実りの秋を迎えるというのに、芸術の古都に小さな騒ぎが起こった。

路上のホームレスが一人、夏の猛暑と栄養失調で死んだ。あまりに悪趣味な画風に、絵描きを名乗る浮浪者仲間からも嫌われていた彼の周りには、粗末な画材と、まるで今にも血が溢れ出し筋肉が痙攣しそうな、不気味な死体の絵が山と積まれていた。半袖の制服に汗を吸わせる警察官が、それを一枚一枚、嫌悪に眉をひそめながらも眺めてから、焼き場へ向かう台車に放り込んでいく。

そうとも知らず、路肩に転がる蝉はその後暑い空に焦がれて仰向けに眠る。爽やかな北方の風が、その体をゆっくりと冷やしても。